

平城宮の隅木蓋瓦

平城宮の発掘調査で出土した隅木蓋瓦を概観し、特に第一次大極殿院の出土品について述べる。

平城宮の隅木蓋瓦の型式と分布 これまでに出土した隅木蓋瓦は、大きく4型式の存在が認められる。各型式の特徴と宮内での出土分布は次のとおりである(図1・2)。

A型式：分厚い蓋板下面両側縁に、細い凸帯を設け、正面(木口)に上下を珠文帯ではさんだ花雲文をかざる。茅負のあたる部分は、燕尾状の削形をもうけ、隅木に固定するための釘穴2箇所をあける。第一次大極殿院出土。

B型式：蓋板下面両側縁、正面下部の三方に幅広の凸帯(中央に水切りの溝をもつ)をめぐらし、上面は低い山形をなす。上面削形縁に細い凸帯があり、中央で短く交差させる。釘穴は中央に1箇所。第二次内裏地区、第二次朝堂院地区が主体である。

C型式：蓋板下面の内側三方に凸帯をもうける。上面はB型式と類似した山形をなす。釘穴は1箇所である。第二次大極殿と後殿および第二次朝堂院地区から出土。

D型式：薄い蓋板の下面両側縁に凸帯をもつもの。西面南門(玉手門)例は小片のため不明だが、正面下部にも凸帯がつく可能性が高く、蓋板上面は甲張りをなし、釘穴は2箇所に復原できる。

第一次大極殿院の隅木蓋瓦 第一次大極殿院南門の東にたつ5×3間の東西棟建物(東楼SB7802、神亀、天平初年頃に増築され、天平末年～天平勝宝5年頃まで存続)柱抜取穴から出土した隅木蓋瓦について述べる。隅木蓋瓦は、A型式に属する約4個体分の破片で、幅は約40cm、削形は約80度の角度をなす形に復原できるが、全長については、厳密には決め手がない。釘穴は2箇所。

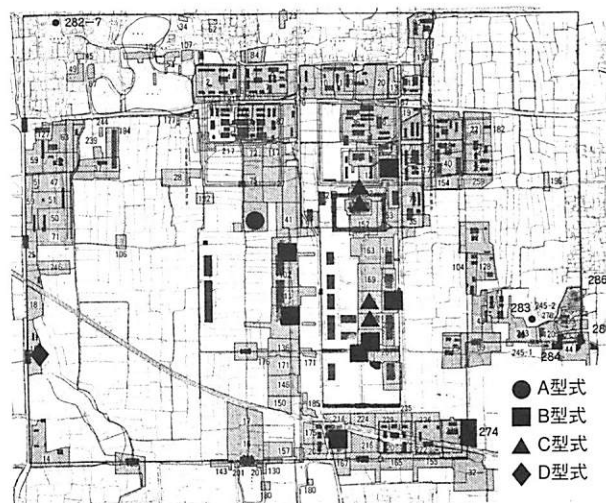


図2 平城宮隅木蓋瓦の出土分布

この隅木蓋瓦は、削形細部の特徴などから、型を使用して成形していることがわかる。下面は側縁の凸帯(幅約1.5～2cm、厚さ約1.5～2cm)の作り出しを含めて全面をへら削りによって仕上げ、厚さ(7.3～8.6cm)は個体差が大きい。凸帯間の内法は、37cm前後に復原できる。凸帯から1.5cm内側に丹土と推定される赤色物質が付着しているものがあり、隅木の幅の推定に参考になる。釘穴(一辺約1.5～1.8cmの方形)は成形時に穿つ。上面釘穴周辺には、釘の頭部痕跡が長円形(5.8×4.7cm)の色の違いとなって明確に残る破片がある(図3)。A型式は、宮内の他の地区では出土しておらず、第一次大極殿院に限って使用された特色ある型式とみなすことができる。

(千田剛道/平城宮跡発掘調査部)



図3 第一次大極殿院出土の隅木蓋瓦(撮影 中村一郎)

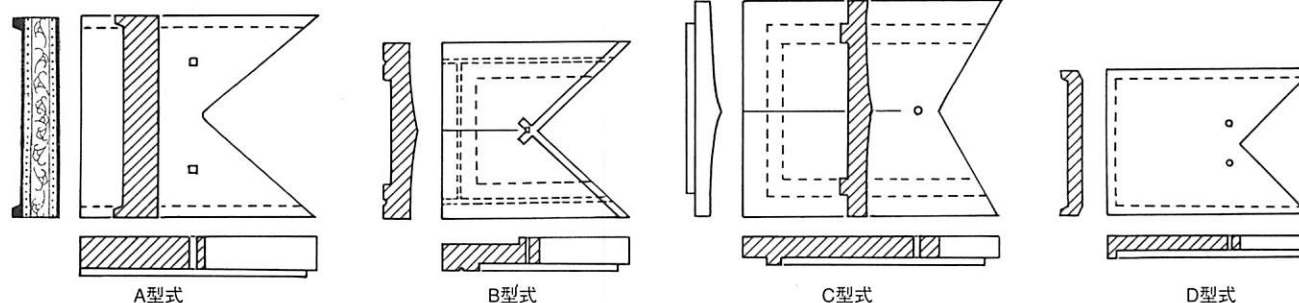


図1 平城宮の隅木蓋瓦の型式(模式図 1:15)